尊厳死法案
人生の最後をどう生きるか

科学医療部
辻 外記子

尊厳死法案
- いわゆる「尊厳死法案」
- 立法として提出されそう。
- 私は「延命治療が患者の
  立法を長引かせる」と考え、法案が早く提出
  割引されるとは思えない。

声が弱い状況を示すために、「
何が足りないかを感じる
ようになっている。

この法案は、本人が延命治
療をやめても、医師は責任を
問われないというものだ。

しかし、事実上「死を急が
されるのではないか」という
不安は消えない。中でも障害
者団体は「生きる権利が奪われ
ない、個人の生き方に着目す

米国で生まれた「エンド・
ライフケア」という考え方
が、人生の最終段階
を受けていった。看護師らの
チームが、本人の希望の把握に
努め、同様な病状であっても、人
において選択は異なる。国内

「尊厳ある死」の前に、「人生
未末期」という呼び方を「人生
の最終段階」に変えようと提
案したのも、厚生労働省が昨年度、
一斉を担保する。こうしたケアを
広めることが重要だ。

遅延労働省では昨年度、
終末期に「尊厳ある死」の前に、

医療行為だけでなく、

自分の思いが反映されるか、家族と
関係を持てしっぱない。そこで

考えた様々な場面で、患者の意
思が尊重される工夫を、ひとつ
ひとつ積み重ねたい。